

名古屋空襲

名古屋のまちづくりを検証するうえで重要なのは、405年前の「清洲越し」とともに、戦時下の空襲から戦災復興に至る過程である。戦後70年にあたり、近代都市名古屋から終戦までを振り返ってみた。写真は『名古屋市 戦災焼失区域図』（昭和21年刊、復刻版、昭和60年）である。焼失地域が朱色で表示されており、これが名古屋空襲の跡だ。

『新修名古屋市史第6巻』第12章のタイトルは「名古屋空襲」である。その最後の第5節「名古屋の壊滅、そして敗戦」から一名古屋の空襲回数は65回に及ぶ。B29の来襲機数は2579機に達し、投下弾は判明分のみで1万4500トンを超える。空襲による死者は7858名、負傷者1万387名、被害戸数13万5416戸に及ぶ。



このように名古屋が繰り返し空襲を受けたのは、名古屋が航空機産業のメッカであったからである。三菱重工業名古屋発動機製作所・航空機製作所、愛知時計電機・愛知航空機、陸軍造兵廠千種製造所・熱田製造所等々、そしてそれらの下に広がる膨大な関連工場・下請工場、その総体として見るならば、名古屋市がまさに一つの巨大な航空機生産工場であったと断言してもいい。とりわけ航空機生産の最大拠点である名古屋三菱発動機は、東京の中島飛行機武蔵工場とともに、米軍の日本本土空襲の第一目標であり、繰り返し目標爆撃の対象となった。

名古屋市は、北方（東、北両区）と南方（熱田、南、港の各区）に工場地帯、中央（中、栄両区）には商業繁華街があり、その前後や周辺地域には密集した住宅街があった。そのなかに中小工場が散在しており、人口密度は高く住居のほとんどが木造であった。致命的ともいえる防空上の弱点をもっていた。

19年12月13日に始まる7度にわたる目標爆撃により三菱発動機は壊滅し、他の主要工場も破壊された。さらに軍需生産を支える基盤であった市街地も、5回にわたる大量の焼夷弾爆撃により50パーセント以上が焼き払われた。廃墟となった名古屋駅頭に立って東の方を眺めると、東山から八事、猪高、茶屋ヶ坂等々の山々の稜線が、見渡せるほど遠くまで焼野原になった。このような壊滅的な破壊と多大な犠牲のうえに、名古屋市民は昭和20年8月15日、敗戦を迎えたのである。

今回のレポートは、名古屋のまちづくり検証作業の一環である。

(2015年5月20日)